

【緑地を楽しむ本】

『ナージャ 希望の村 チェルノブイリ、いのちの大地』

本橋成一 文・写真

学習研究社



かがやく新緑と咲き乱れるりんごの花・・・ユートピアのような美しい村、ドウチチ村。そこに住む少女、ナージャが、村の紹介をしてくれます。村にはナージャの家族のほか5家族しか残っていません、子どもはナージャの兄弟だけ。この村は1986年にチェルノブイリで起こった原発の爆発のため、放射能で汚されて人が住めな

くなくなりました。

川も、野原も畑も、村の姿はどこも変わっていないのです。それなのに、どうして引っ越さなければならぬのでしょうか。町に移り住んだナージャは学校に通い、原子力について学びました。チェルノブイリの爆発事故では、原子炉の中の100種類もの放射性物質が飛び散り、風に運ばれて、村を汚したのです。それはこれから何十年も何千年も、ものによっては何万年も放射能を出し続けるのだそうです。大人になったらまたドウチチ村に戻

れると思っていたのに、もうずっと、大好きだったあの村には戻れないのです。

どうしてそんな危険なものを作ったのでしょうか。「原子力発電所は電気をたくさん作って冷蔵庫や洗濯機を作ったりテレビを見たり、みんなが便利になって豊かに暮らせるようになるためのもの」と先生は話してくれました。でも、ドウチチ村では冷蔵庫も洗濯機もなかったし誰も欲しいと思っていなかった・・・皆、今までの生活に満足していたのです。村のおばあさんはよく「この村はゆたかだろう、春は花がいっぱい咲いて秋には白樺が黄金色になるよ」と話してくれていました。どうやら原子力発電所の作る豊かさ、おばあさんの言ういのちのゆたかさはどこかが違うようだ、とナージャは気づいていきます。

どんな難しい本を読むよりも、この本は「本当のゆたかさとは？」ということを考えさせてくれました。福島原子力発電所の事故を体験して特に今、この問いはますます深く、私につきつけられています。

※この本は現在出版社で在庫切れ。図書館で読んでください。

(小川)